

ろくがつく
六月の句

ろくがつや

みねにくもおく あらしやま

六月や峰に雲置く嵐山・松尾芭蕉

やせがえる

まけるないつき これにあり

やせ蛙負けるな一茶これにあり・小林一茶

さみだれや

たいがをまえに いえにけん

五月雨や大河を前に家二軒・与謝蕪村

かたつむり

みずべはひとの よるところ

蝸牛水辺は人の寄るところ・稲畑汀子

しばらくは

ゆらしてふくむ さくらんぼ

しばらくは揺らして含むさくらんぼ・黛まどか

あめのおおくなるきせつです。でも、あめがふると、いきものやおはなは、げんきになります。みなさんも、まけないように、げんきにこえをだしてみましょう。

あめ
雨のうた

つるみまさお
鶴見正夫

あめはひとりじゃ うたえない、
きつとだれかと いっしょだよ。
やねと いっしょに やねのうた
つちと いっしょに つちのうた
かわと いっしょに かわのうた
はなど いっしょに はなのうた。
あめはだれとも なかよしで、
どんなうたでも しゃってよ。
やねで とんとん やねのうた
つちで ぴちぴち つちのうた
かわで つんつん かわのうた
はなで しとしと はなのうた。

あめのひがおおい6がつ。あめはやねと、つちと、かわと、はなどいっしょにうたっています。あめといっしょにうたうようにたのしくよんでみましょう。

おくのほそみち ひらいすみ まつおばしろう
奥の細道・平泉 松尾芭蕉

かねてみみおどろかしたる
にどうかいちちようす。

兼て耳驚したる二堂開帳す。

きようどうは さんしよのぞうをのこし、

経堂は三将の像をのこし、

ひかりどうは さんだいのひつぎをおさめ、

光堂は三代の棺を納め、

さんぞんのほとけをあんちす。

三尊の仏を安置す。

しちほうちりうせて、

七宝散うせて、珠の靡風にやぶれ、

たまのとぼそ かせにやぶれ、

こがねのはしら そうせつにくちて、

すでにたいはいくうきよの

金の柱霜雪に朽て、

くさむらとなるべきを、

既頽廢空虚の叢と成べきを、

しめんあらたにかこみて、

四面新に圍て、薨を覆て風雨を凌。

しばらくせんざいのかたみとはなれり。

暫時千歳の記念とはなれり。

さみだれの ふりのこしてや ひかりどう

五月雨の降のこしてや光堂

光堂とは、岩手県にある中尊寺金色堂のこと。その美しさを聞いて訪れてみたいと思っていた。光堂を拝観し、驚いている松尾芭蕉さんでした。

ぼうころうのあめ
望湖楼の雨

そしよく
蘇軾

ろくがつにじゆうしちにち

ぼうころうすいしよ

六月二十七日
望湖楼醉書

こくうんすみをひるがえして

いまだやまをさえぎらず
黒雲翻墨未遮山

はくうたまをおどらせて

みだれてふねにいる
白雨跳珠乱入船

ちをまきかぜきたつて

たちまちふきさんず
卷地風来忽吹散

ぼうころうかみずてんのごとし

望湖楼下水如天

漢詩(かんし)をよんでみましょう。

望湖楼にて酔いにまかせて。黒い雲が墨をこぼしたように広がってきたが、まだ、山をすっかり隠してはいない。白い雨粒が、真珠をばらまいたように船にたたきつけ、地を巻き上げるような風が吹いて、あつというまに雲を払い、望湖楼の湖面は、大空を映して青々と澄みわたった。

